様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０２５１６

研究課題名（和文）英国の初等教育におけるオーラシー育成:教育目標・評価、指導の実際、環境デザイン

研究課題名（英文）Oracy and Education: Focusing on Primary Schools in UK

研究代表者
川地　亜弥子（Kawaji, Ayako）

神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：２０４１１４７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：Oracy Cambridgeとオーラシー実践推進校School21（初等・中等・中等後教育の３つの学校で構成される多様な子どもたちが通う学校）は共同でオーラシーのフレームワークを開発し、身体、言語、認知的観点に加え、社会情動的観点を位置づけている。ウェールズのカリキュラムにおけるオーラシー調査報告書でも、認知的成果に加え、社会情動的成果が得られることが示され、評価・確認可能であることを複数の研究論文を根拠として示している。評価の難しさからいったん下火となったと指摘されてきたオーラシー育成について、新しい動向があることが明らかになった。パンデミックによって現地調査は限定的なものになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
英国では、オーラシーの育成を子どもの権利保障の一環として行っている。人間性の根源を重視し、貧困克服、子どもの権利保障（特に参加の権利、意見表明権・聴いてもらう権利）、話し合いによる新しい価値創造の観点等から研究が進められている。オーラシーを自然な発達に任せていては格差拡大につながること、移民や特別な教育的ニーズがある子どもたちも含めてすべての子どもに教えることができること、教えることで格差を縮小できること等の提起は、日本の教育政策にも大きな示唆を与え、社会的意義が大きい。権利保障としての教育と評価の関係について、米国とは異なる展開が示されている点は学術的意義が大きく、今後も研究が必要である。

研究成果の概要（英文）：Oracy Cambridge and School21, an Oracy School (comprising three schools with diverse children in primary, secondary and post-secondary education), have jointly developed an Oracy framework, which positions a social-emotional perspective in addition to the physical, linguistic and cognitive perspectives. The research report of Oracy curriculum in Wales also showed that in addition to cognitive outcomes, social-emotional outcomes can be achieved and provided evidence from multiple research papers that this can be assessed and confirmed. It is clear that there is a new trend in Oracy development, which has been noted to have gone downhill once due to the difficulty of evaluation. Field research was limited by the pandemic.

研究分野：教育方法学

キーワード：オーラシー（Oracy）　言語教育　教育目標・教育評価　教育環境デザイン　ケア　英国　話す・聴くことの教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

英国、とくにイングランドにおいて、20 世紀初頭から話すことの教育は注目されていたものの、それは標準語の話者を増やすためであった。1960 年代に、移民の増加、総合学校（学力選抜を行わず全ての子どもを受け入れる学校）の増加と、Bruner や Bernstein の研究の影響から、言語と格差の問題に注目が集まり、研究運動が広がった。教育に関する転換の契機をもたらしたのは Wilkinson である。彼は、著書 Spoken English（1965）において「英国において話し言葉の教育は恥ずべきほどに無視」(p.1) されていると主張し、話し聞くことは人間性の根源であり、すべての教科における学習の条件をなすものと位置づけ、読み書きを通じて養われるリテラシーと同等に重要なものとして、話し聞くことを通じて養われるものをオーラシー（狭義には話す・聴く力。読み書きの力を literacy と呼ぶことからの造語）と名付けた。その後、英国のオーラシー研究は幾度かの画期を経て、現代では、貧困克服、子どもの権利（とりわけ参加の権利、意見表明権・聴いてもらう権利）保障、話し合うことによる新しい価値創造の観点等から研究が進められていた（Littleton, K. & Mercer, N. 2013 他）。

英国では、オーラシーを個人の能力（一定の語彙をベースにした推論・物語る力など）ととらえてその欠如に焦点をあてる「オーラシーの赤字モデル」には限界があることが指摘されていた（Howe 2019a）。むしろ、その子どもにとって最も重要な話に真摯に耳を傾け、味わい、子どもにそれを伝える中で、子どもの豊かな言語資源にたどり着くことができるし、その方がはるかに人道的であり、教育の見通しを持ちうると述べられていた。そこでは、専門家は「支配者ではなく酵母（Yeast, not rulers）」の役割を果たすことが求められた（Howe 2019b）。つまり、子どもにとって意味深い内容を、子どもから引き出し、質的に豊かにしていくことが教師を含む専門家の役割として認識されていた。

こうした知見は、日本の学習指導要領における資質・能力論およびその育成のために注目されているディープ・アクティブラーニング研究に重要な示唆を与えると思われた。ディープ・アクティブラーニングでは、アクティブラーニングが「見た目の活発さ」を追求しがちになり、見えない内面の動きを軽視する傾向を生み出すという弊害を乗り越えるために、深さの次元に注目している（松下等 2015）。しかし、その深さが教科内容に関するものに留まるのであれば、貧困、発達障害、人間関係への不安などによって学びの場に入りにくい人が排除されてしまう。そこで生活綴方やパーソナルライティングなど、個人にとっての意味深さを追求する指導の研究が、特に書くことの指導の領域で進んでいた（谷 2015、川地 2018b）。

オーラシー研究では、子ども個人にとっての意味深さを、子どもが自らの言葉で語ることに注目している点で、日本におけるこうした教育実践との類似点も見受けられる。その一方、いくつかの重要な相違点もあり、詳細な調査が必要だと考えた。

２．研究の目的

現代の英国初等教育におけるオーラシーの育成について、その理論的、実践的特徴を明らかにし、日本の初等教育の改善に資することを目指した。オーラシーはリテラシー同様、もしくはそれ以上に家庭や学校の影響を受けやすい力であり、2017 年版学習指導要領に記載された資質・能力（コンピテンシー）概念と関係が深く、ディープ・アクティブラーニング研究へも重要な示唆を与えると考えた。英国の初等教育におけるオーラシーの育成について、特に、目標と評価、指導の実際、アートの専門家の役割、環境、食の保障について明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

文献調査、観察、聴取調査を行った。具体的には以下のような方法をとる予定であった。

目標（aim と goal）・評価、指導の実際の調査・分析を、代表者の川地が行う。ただし、指導の実際については、場の状況が刻々と変化し、子どもの言葉や行動の意図が分かりにくく、指導者の「名人芸」のように見えることもある。このため、専門家の鑑識眼と臨機応変の応答に関する知見を発表してきた赤木と共に分析を行うこととした。

予備調査において、オーラシーの育成ではアートの専門家の役割を重視していることが示されていた。とくに、学校におけるホールや教室等のデザインそのものを変えていく役割が重視されていた。勅使河原は、美術館等との連携・協力よる環境設定を行ったうえでの対話的鑑賞について精力的に研究を蓄積しており、アートの専門家の役割について調査・分析を行うこととした。

Education の語源であるラテン語の Educare にまで立ち戻れば、教育の場はケアの場でなければならない（白水 2011）。英国では、朝食の提供（ブレックファストクラブ）に力を入れている学校も多く（末冨 2017）、予備調査では、朝食を提供するだけでなく友達や指導員と遊び、精神的に満たされた状態で過ごすことも重視されていた（川地 2018a）。オーラシー育成指導の前提としての、子どもの食を中心としたケアについて、中谷が調査・分析を行うこととした。

ただし、パンデミックの中で、現地での観察には困難が伴い、文献調査、聴取調査が主となり、観察は予定よりも限定された回数となった。

４．研究成果

① 現代英国教育政策におけるオーラシー育成への注目：　現代の英国では、オーラシー育成が教育政策の要の一つとして位置づきつつあることが明らかになった。ウェールズではすでに英語とウェールズ語の双方におけるオーラシー育成がカリキュラムの柱の一つとなっている。イングランドでも超党派オーラシー調査グループ（Oracy-APPG）が 2019 年に結成され、2023 年 7 月に労働党党首が政策提言で福祉・教育分野におけるオーラシー育成の重要性を強調し、注目が集まっていることが明らかになった。

② 子どもの権利保障としてのオーラシー育成：　現代英国では、「人間性の根源」を重視する立場を継承し、貧困克服、子どもの権利保障（特に参加の権利、意見表明権・聴いてもらう権利）、話し合いによる新しい価値創造の観点等から研究が進められていることが明らかになった（Littleton & Mercer 2013）。

③ 研究機関による教育を通じたオーラシー保障の主張：　研究の中心を担う OracyCambridge（英国ケンブリッジ大学の研究グループ。以下 OC）は、オーラシーを自然な発達に任せていては格差拡大につながること、移民や特別な教育的ニーズがある子どもたちも含めてすべての子どもに教えることができること、教えることで格差を縮小できることに加え、評価可能（be assessed）であることを主張している。

④ オーラシーフレームワークと評価：　OC とオーラシー実践推進校 School21（初等・中等・中等後教育の３つの学校で構成される多様な子どもたちが通う学校）は共同でオーラシーのフレームワークを開発した。身体、言語、認知的観点に加え、社会情動的観点を位置づけている。ウェールズのカリキュラムにおけるオーラシー調査報告書（Mercer & Mannion 2018: 11）でも、認知的成果に加え、社会情動的成果（自尊心・社会性・仲間との交流・大きな共感・ストレスマネジメントでの効果）が得られることが示され、評価・確認可能であることを複数の研究論文を根拠として示している。

　これは、評価の難しさからいったん下火となったと指摘されてきた（矢野 2016）オーラシー育成についての新しい動向と考えられる。

⑤ 学校におけるオーラシー評価：　オーラシー研究校であるロンドンの School21 では、オーラシーについて、感情、認知、身体、言語の 4 観点から測ることができる（be measured）ものとしてとらえられていた。ただし、授業を実際に見学すると、観点バラバラの指導・評価ではなく、むしろ生活の中で生きて働く総体としての言語（志摩 1992、川地 2014）を評価しようとしていた。

⑥ アートによる学校や教室の環境デザイン・形成：　各学校はアートの専門家の協力を得て子どもたちの作品を上手く取り入れ、オーラシーが効果的に育成できる環境形成に取り組んでいた。その中で、共感的に聞くことが目指されていた。

⑦ 市場原理下におけるオルタナティブな教育改革の志向性：　オーラシー育成を通じた貧困の改善という点では、学力保障による貧困の改善を目指した No Child Left Behind 論（ブルーム 1986）との類似性があった。ただし、米国では、運動の拡大、制度化の後にマイノリティの排除へ結びついたことが指摘され（吉良 2009 等）、教育改革の失敗例の一つともみなされている。これに対し、学校間連携プロジェクトの一つとしてオーラシー研究を行っている英国ロンドンのカムデン地区では、「No Child Left Behind, No School Left Behind」を合言葉に、予算や職能成長に関する学校間の互恵関係を築き、困難な地域でありながら高い成果を得ていた。

⑧ 子どもの食を中心としたケア：　パンデミックによる施設の一時閉鎖、部外者の立ち入り禁止期間があり、現地調査は困難であったが、文献調査を遂行した。また、協力施設から年次報告書等の資料提供を受けた。

⑨ 英国の現地調査が困難であったこともあり、日本の教育機関や生涯学習の場における調査を遂行し、日英の取り組みの架橋を試みた。インクルーシブかつ子どもが楽しんで参加する学びの場づくりについて、多くの成果を得られた。

　なお、以上について各自が成果発表を行い、それらについてはすでに報告している。加えて、勅使河原が、オーラシー理論を基盤とした対話型鑑賞に関する分析に研究協力者と共に取り組んだ成果について投稿予定である。

　今後の課題としては、ウェールズの取り組みにも目配りをしつつ、主にイングランドのオーラシー育成に関する理論と実践を対象に調査を進める。特に、英国には、マイノリティの子どもたちの話しにくさ・理解のされにくさに配慮した教育として、Learning without limits の理論と実践がある。川地・勅使河原・赤木は、2017-2021 年度科研調査において、そこで全人的な評価、とりわけ意味深さに注目した評価が重視される一方、認知的観点と社会情動的観点の関係や、集団の育ちについての評価は明確ではないことを明らかにしている（川地 2022）。オーラシー育成における評価に注目し、④のような観点別評価と、全人的な評価の関係を明らかにする必要があるだろう。

　また、これらの研究成果を生かし、日本の学校教育（目標・評価、カリキュラム、指導、環境設定、ケア）や生涯学習、福祉的取り組みへの助言・提言を行うことや、日本の取り組みについて英国を中心としたオーラシー研究者と交流することも重要な課題となろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計25件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 中谷奈津子	４．巻 16(2)
２．論文標題 子どもの貧困における保育の役割と課題：2000年以降の海外文献レビューをもとに	５．発行年 2022年
３．雑誌名 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要	６．最初と最後の頁 127-167
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 赤木和重・川地亜弥子・津田英二・河南 勝・佐藤知子・殿垣亮子・柴田真砂代・黒川陽司	４．巻 16(2)
２．論文標題 知的障害青年の大学教育プログラムはなにをもたらしたか？：教育専門職養成大学における3年間の実践を通して	５．発行年 2022年
３．雑誌名 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要	６．最初と最後の頁 203-211
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 前岡良汰・ 赤木和重	４．巻 43(2)
２．論文標題 小学校教師は授業スタンダードを採用したいのか：自校児童の授業スタンダードに対する調査結果を踏まえた検討	５．発行年 2022年
３．雑誌名 心理科学	６．最初と最後の頁 106-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 赤木和重	４．巻 436
２．論文標題 イタリアの教室に入ってみた【第2回】加配は，障害児個人につくのではなく，クラスにつく	５．発行年 2022年
３．雑誌名 はあとブリッジ	６．最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川地亜弥子	4．巻 57
2．論文標題 1930年代の生活綴方における知の創出：子どもの生活と表現にねざす教育論を目指して	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本の科学者	6．最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 パトリック・ショーブ，カーステン・ケンクリス，山﨑 洋子，佐久間　裕之，川地 亜弥子	4．巻 26
2．論文標題 『日本における教育的進歩主義、文化的邂逅と改革』書評セミナー(2) ：討論の記録	5．発行年 2023年
3．雑誌名 教育科学論集	6．最初と最後の頁 65-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 パトリック・ショーブ，カーステン・ケンクリス，山﨑 洋子，久野 弘幸，川地 亜弥子	4．巻 26
2．論文標題 『日本における教育的進歩主義、文化的邂逅と改革』書評セミナー(1) ：講演の記録	5．発行年 2023年
3．雑誌名 教育科学論集	6．最初と最後の頁 53-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 川地亜弥子	4．巻 923
2．論文標題 9・10歳の節と学校の役割	5．発行年 2022年
3．雑誌名 教育	6．最初と最後の頁 91-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 赤木和重	4．巻 806
2．論文標題 即興の視点から考える発達障害のある子どもたちの学び	5．発行年 2021年
3．雑誌名 指導 と評価	6．最初と最後の頁 54-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 赤木和重	4．巻 676
2．論文標題 自閉症教育における支援プログラムとの「ほどよい」つきあいかた	5．発行年 2022年
3．雑誌名 みんなのねがい	6．最初と最後の頁 15-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川地亜弥子	4．巻 662
2．論文標題 「むっちゃ楽しい」クラスの中で	5．発行年 2021年
3．雑誌名 みんなのねがい	6．最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川地亜弥子	4．巻 663
2．論文標題 一人ひとりの姿、思いを深く想像して	5．発行年 2021年
3．雑誌名 みんなのねがい	6．最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川地亜弥子	4．巻 664
2．論文標題 要求を育てる	5．発行年 2021年
3．雑誌名 みんなのねがい	6．最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川地亜弥子	4．巻 665
2．論文標題 ゆたかな人間関係と偏食指導	5．発行年 2021年
3．雑誌名 みんなのねがい	6．最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川地亜弥子	4．巻 666
2．論文標題 実践報告・記録のねうち	5．発行年 2021年
3．雑誌名 みんなのねがい	6．最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川地亜弥子	4．巻 667
2．論文標題 子育て・療育・発達相談	5．発行年 2021年
3．雑誌名 みんなのねがい	6．最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川地亜弥子	4．巻 668
2．論文標題 一人ひとりが輝くみんなで学ぶ授業をつくる	5．発行年 2021年
3．雑誌名 みんなのねがい	6．最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川地亜弥子	4．巻 669
2．論文標題 やってみる、なってみる	5．発行年 2021年
3．雑誌名 みんなのねがい	6．最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川地亜弥子	4．巻 674
2．論文標題 楽しい節目をつくりだす	5．発行年 2022年
3．雑誌名 みんなのねがい	6．最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川地亜弥子	4．巻 22
2．論文標題 児童生徒の学習評価における「学びに向かう力、人間性等」の評価に関する覚書	5．発行年 2021年
3．雑誌名 教科外活動と到達度評価	6．最初と最後の頁 70-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川地亜弥子	4．巻 49(3)
2．論文標題 現代の学校教育をめぐる政策・提言と教材論	5．発行年 2021年
3．雑誌名 障害者問題研究	6．最初と最後の頁 2-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川地亜弥子	4．巻 910
2．論文標題 特別支援教育の動向と課題	5．発行年 2021年
3．雑誌名 教育	6．最初と最後の頁 69-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川地 亜弥子，勝冶 友紀子	4．巻 24
2．論文標題 教育・子育て支援に関する日英比較オンライン研修：GSPの教育目標分析に基づくプログラム開発	5．発行年 2021年
3．雑誌名 教育科学論集	6．最初と最後の頁 45 - 52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川地 亜弥子	4．巻 888
2．論文標題 学校で学ぶことと生活綴方	5．発行年 2021年
3．雑誌名 作文と教育	6．最初と最後の頁 6-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川地亜弥子	４．巻 203
２．論文標題 新型コロナ禍で問われる学校の役割	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ひろば	６．最初と最後の頁 4 - 9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 寳槻グラント純子、Michele Wright、Lynn Tumber、中谷奈津子
２．発表標題 イングランドにおける家族支援・保護者支援
３．学会等名 神戸大学国際人間科学部子ども教育学科国際シンポジウム
４．発表年 2022年

１．発表者名 川地 亜弥子，寳槻 グラント 純子
２．発表標題 教育・子育て支援に関する日英比較オンライン研修
３．学会等名 オンライン・コミュニケーション教育・研究をふりかえって：留学・海外研修プログラムの新展開（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計5件

１．著者名 赤木和重・呉 文慧	４．発行年 2022年
２．出版社 福村出版	５．総ページ数 2
３．書名 応用心理学ハンドブック	

１．著者名 川地亜弥子	４．発行年 2022年
２．出版社 全障研出版部	５．総ページ数 135
３．書名 子どもとつくるわくわく実践	

１．著者名 西岡，加名恵，石井，英真	４．発行年 2021年
２．出版社 明治図書出版	５．総ページ数 264
３．書名 教育評価重要用語事典（担当:共著，特別活動における評価（p.203）	

１．著者名 佐古秀一，森田洋司，山下一夫	４．発行年 2020年
２．出版社 学事出版	５．総ページ数 168
３．書名 チーム学校時代の生徒指導　（担当:共著，範囲:３章-II 特別活動と生徒指導―集団的・実践的・自治的活動を通じた人間形成―（pp.113-127））	

１．著者名 神谷拓	４．発行年 2020年
２．出版社 ベースボール・マガジン社	５．総ページ数 328
３．書名 部活動学 ： 子どもが主体のよりよいクラブをつくる24の視点(担当:共著，範囲:22時限目 教育方法学：スポーツ部活動の自治と評価（pp.287-298）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中谷　奈津子 (Nakatani Natsuko) (00440644)	神戸大学・人間発達環境学研究科・教授 (14501)	
研究分担者	勅使河原　君江 (Teshigawara Kimie) (60298247)	神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授 (14501)	
研究分担者	赤木　和重 (Akagi Kazushige) (70402675)	神戸大学・人間発達環境学研究科・教授 (14501)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関